





戀仇花盛街夕暮

初編上

恋仇花盛街夕暮
初編上

志の仇

きんぎょの
ゆふらぎ



錦春堂

梓

<48-8351>

面白く頭も白き霜降りて語りぬだも終るぬ吾もまきりて文へ尚不
 終りも得ぬと此頃小発見あり自由の新聞夫を問はれ兼て其名も
 高かりし新吉原の七人研彼徳永が杉戸樓まで血の雨降らせ顛末
 と粹ま記者が自由の筆小最面白く終らせ芝居口調は新奇案
 朝夕讀で居たりしと進む人のあけし其煽動ふウカと乗り其
 俗委皆拔華一畫を加へ新らしく當時流行の草紙と形し
 此度初編を発売したれば初賣出しの三番叟永々當お求めを
 偏へ伏して願ふらん

明治辛巳春

粹興生志る人

七ノ八ノ二



光
間
枝
抑

柳
川
久
苗
米

萱
川
部

富永俊雄



戀仇花盛街夕暮

吉原萩戸屋の場

中練巻一面の岡平練台上へ

家せそ二箇の入口

店名元附の柵

生中練戸屋と

系せし御暖簾

心付之小鏡ひて

云る通し表格

子ば下さらふの

下地茶の角物

の約よせは内布

小次入の洋燈を下げ蓮ッ巻



於座

長細帯

の形り

ふて

◎ 笠を肩を

のちまひ

◎ 笠を肩を

のちまひ

◎ 笠を肩を

のちまひ

◎ 笠を肩を

のちまひ

◎ 笠を肩を

のちまひ

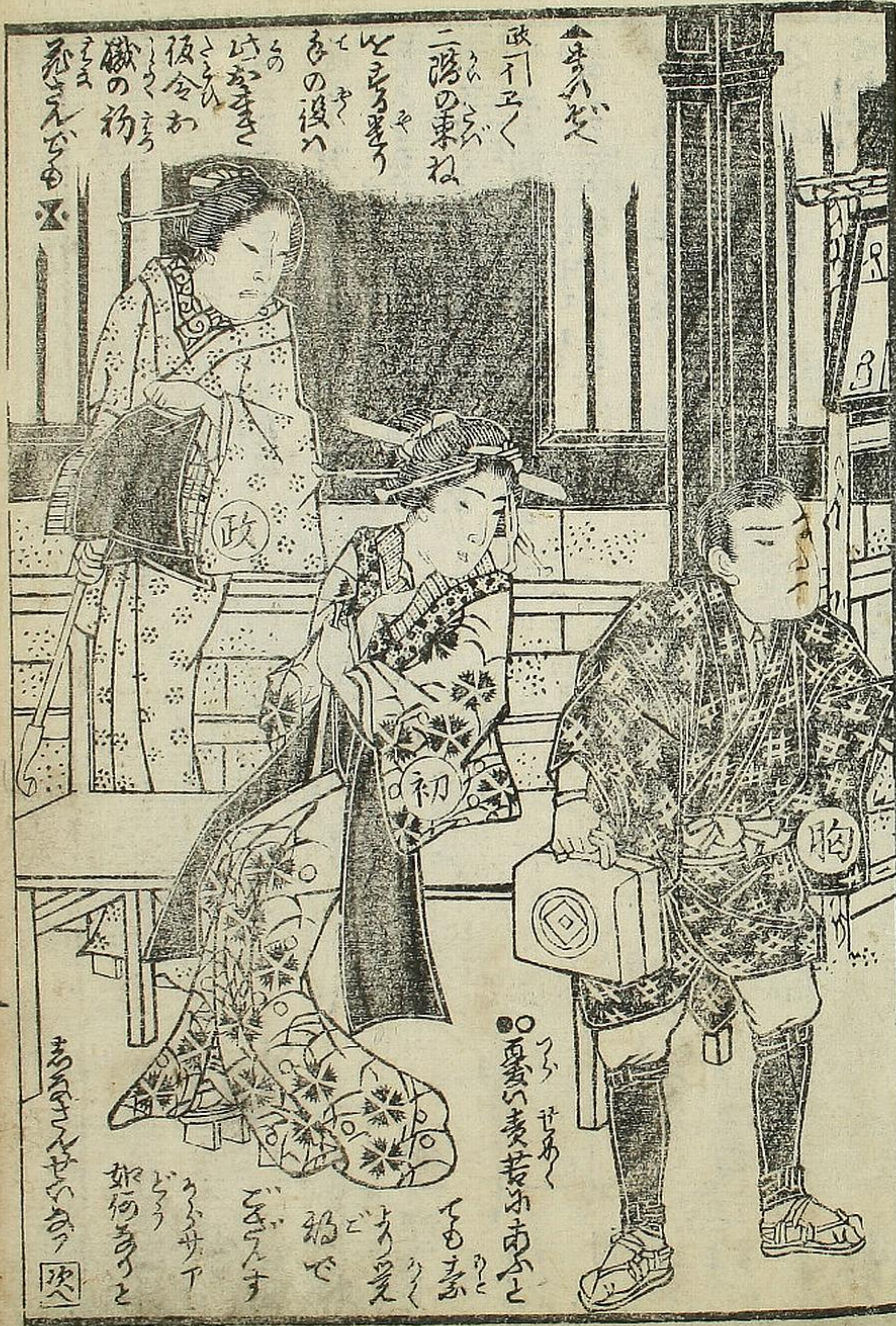


梅堂國政画

番亭樂山著

初編中





政入道
 政入五く
 二階の東に
 此の後の
 けかまき
 復令お
 櫛の粉
 赤いんかゆ

政の妻若小南と
 初
 胸
 如何きと
 赤いんかゆ



平
 直
 如何きと
 赤いんかゆ

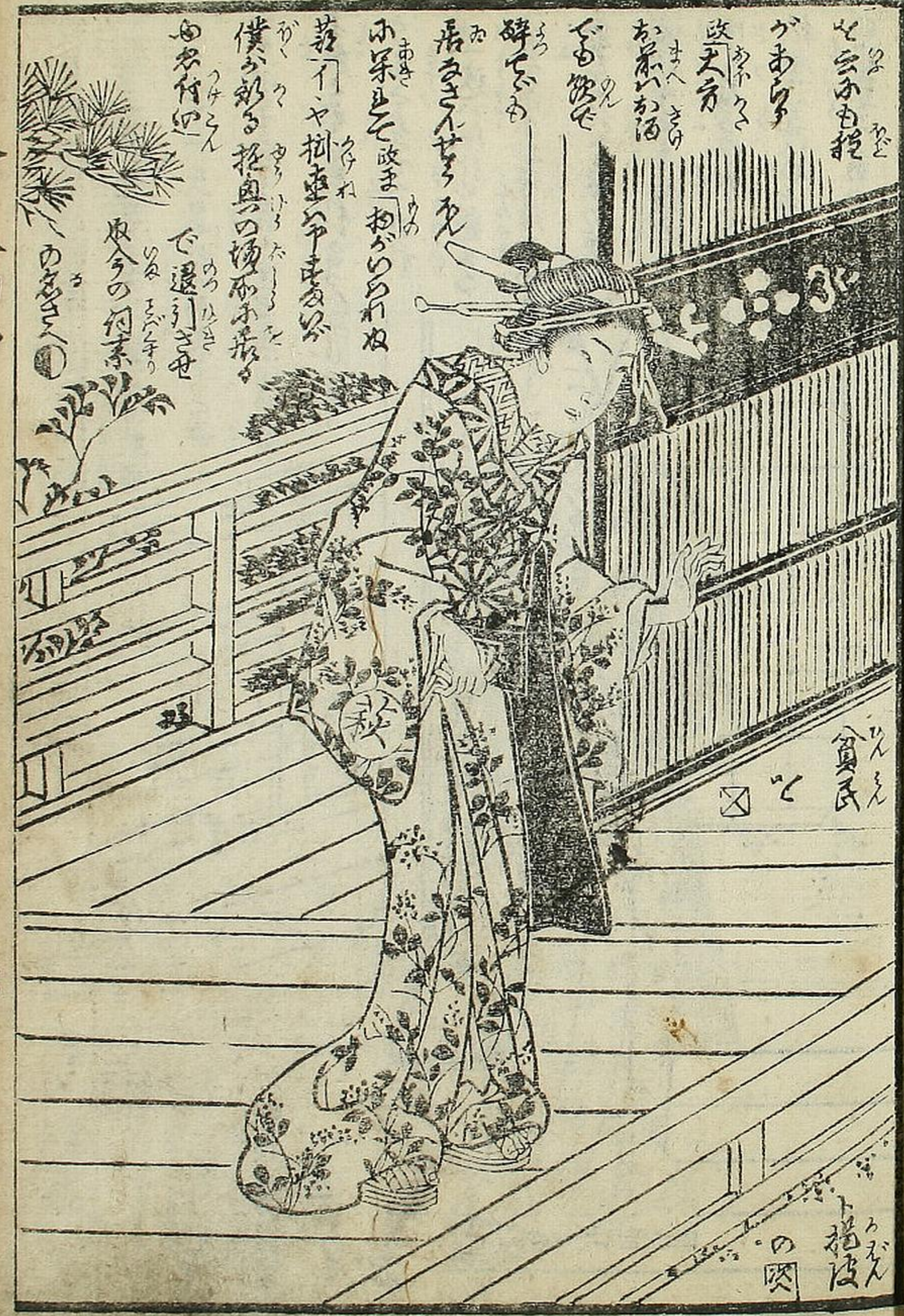
直
 如何きと
 赤いんかゆ



大倉の鈴料とるを悉敷五十や百の風流の塵同様と
 移し来て相場外且の某の代便定ぬ不常事分と
 茶めー
 茶もどらうとされど其は少い今日活計
 茶員民への代で絶て借替が志が殊々
 今宵の相場外は場不故を價して悲端
 後すが人民と救ふ一助のきり
 何卒お求め下さりませ
 平可く恵比壽
 儻の美物やも
 小籠場中まきく物
 一四五枚でまきくのと
 一回と掛直

俊
 千倉丹
 百五十七

△身共も士族
 茶入らぬ寸
 志の松帯
 救ふと云
 茶の味物やも



七三ふも控
 があや
 政大方
 お茶いお酒
 心も飲ま
 酔ていも
 居まさんせうえ
 小茶とて政ま
 薪イヤ掛直やまあゆ
 僕が知る松奥の場不故
 由名付ゆ
 取今の何茶
 のあま入

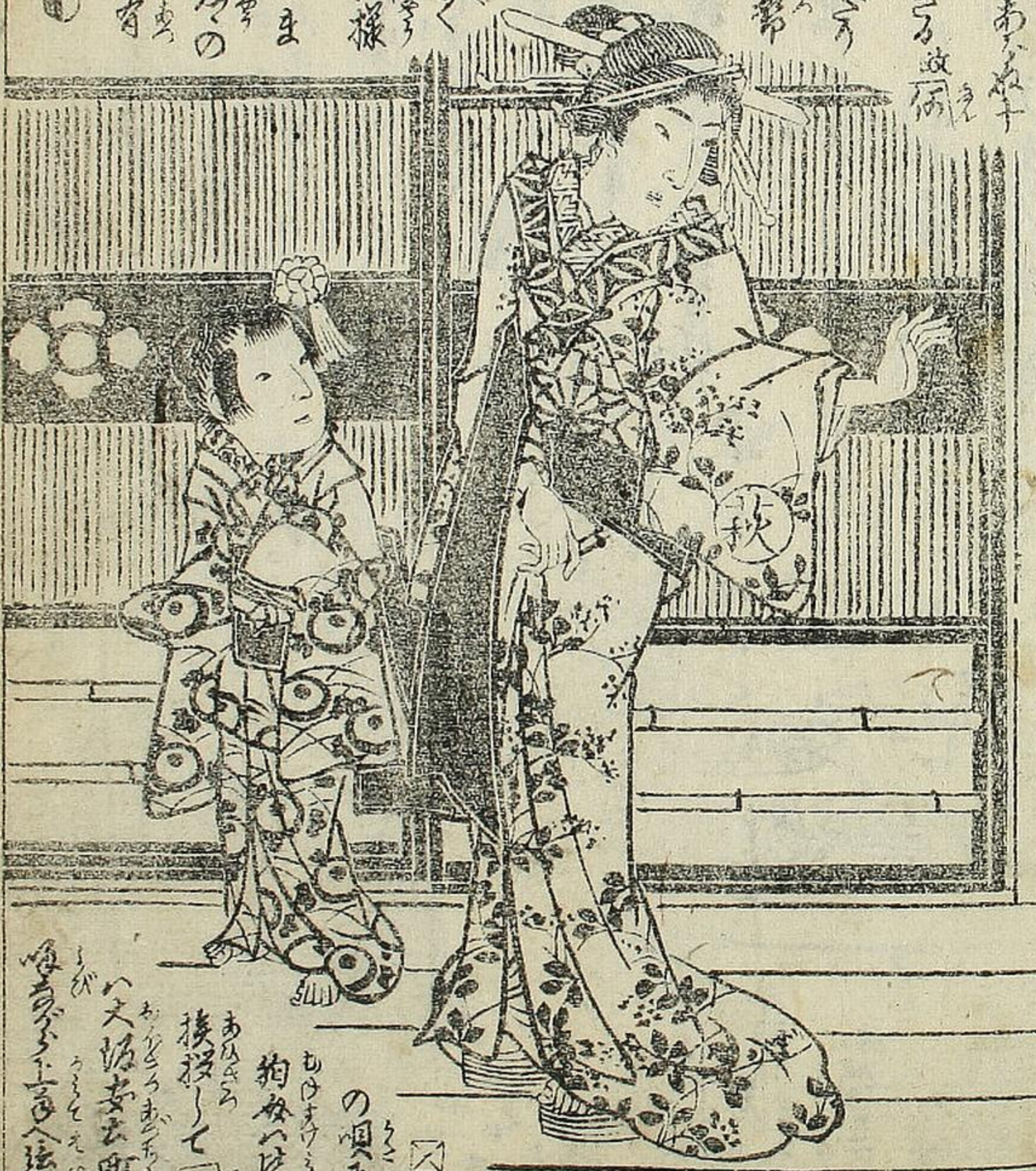
員民
 松
 下掛直
 の吹

中より十四紙幣と出紙幣色で
 是と生葉紙遊ばすト海老と拍ぬ
 交取て拍まりと移へおまると言
 蕨四少多々存々の中西園辺の宿
 士族と取らぬれ合え互以僕か
 寸巻と受て下され
 拍 逆ハ開化の魁ある
 以東京にお住居放切と
 旅とよみ後後の魂ハ
 僻地不生立僕者ハ
 中々及ぶ事とざるト
 紙幣と改め拍ヤ紙幣
 の定号ハ蕨ヤト拍りする



拍 蕨五尋ねて
 ト提役同七付手
 靴足合せ内
 お同小主人柳
 下とらう

拍 ヤサをいふあはれ十
 田紙幣 赤とる改め
 の彼のとと股とねと
 修甘く十四紙幣
 七平 せしめ
 腕ハ遠去る想
 蕨 生か合せ
 葉あふとゆらまゆ
 海老さんせ拍 五様
 ちねお暇波一ま
 せう蕨 同と放々の
 西園育ち縁が有
 ちち赤とる



の唄あり
 拍 蕨ハ
 携投して本家
 八文紙去取ト
 拍 蕨ハ
 拍 蕨ハ



恋の仇

花街並の

夕暮



縁まの
又厚

中々いさよ あやま い ち を も か け つ は 候 死 ん ど も 又 猶 以 小 多 唄 か の ふ と あ の を 推 さ せ

ん勝りいさよ ま せ 取 新 い や お り ぬ る と 少 周 の そ あ て 入 目 と い ふ 拍 敷 の つ ゆ も た く

障入光 菅 川 氏 中 由 安 福 兼 三 階 と 一 杯 飲 と こ が れ 秋 交 と 終 毛 夕 月 夜 下 向 ま り 室

多う生 老 様 お れ は 足 程 換 ま サ 同 乃 結 世 永 後 推 取 整 羽 柳 流 一 三 帯 弱 下 訪 好

下 様 余 を る の 唄 は あり 三 入 暖 簾 足 運 入 の 格 へ 弱 強 の 格 活 余 七 拍 敷 あり 子 役 の 禿

平 今 夜 の 換 不 換 多 の く 暖 れ 相 ま は 換 と 袖 と さ て 付 て 出 て ま り 花 を 不 換 り 後

見 世 只 初 會 の 安 の 格 を 人 知 り せ 今 さ ず 不 換 く 引 は 袖 が 破 れ る 故 も く 禿 ま さ る

換 廻 車 ま と 種 不 換 て 客 と 煽 初 て あ い ら ん が 放 さ ま と 云 れ ん と う は 袖 へ 放 さ ぬ の

あ さ さ る を せ と 後 さ ら う 今 の 車 ま あ や 後 是 ハ 又 迷 惑 心 万 事 言 も 知 て 今 通 り

ゆ ま で 有 う と 八 十 表 を つ と 入 ぬ と 返 し て 以 程 を 入 へ 不 換 理 が あ つ て 如 何 と も 上 ま さ る

揚 白 上 つ と 那 奴 由 油 引 が あ ら ね 入 手 選 符 う と を 教 と 移 し て 異 り や 也 禿 い 子 く 放 す

燈 籠 も 引 る 時 刻 ト リ ヤ 表 で も さ ら う ト と 此 ら さ る も あ ら 後 テ 何 分 の 悪 い 奴 也

平 庭 へ 暖 簾 の 足 運 入 る ト 時 の 禿 又 柳 下 向 と 室 の 禿 也 也

二人



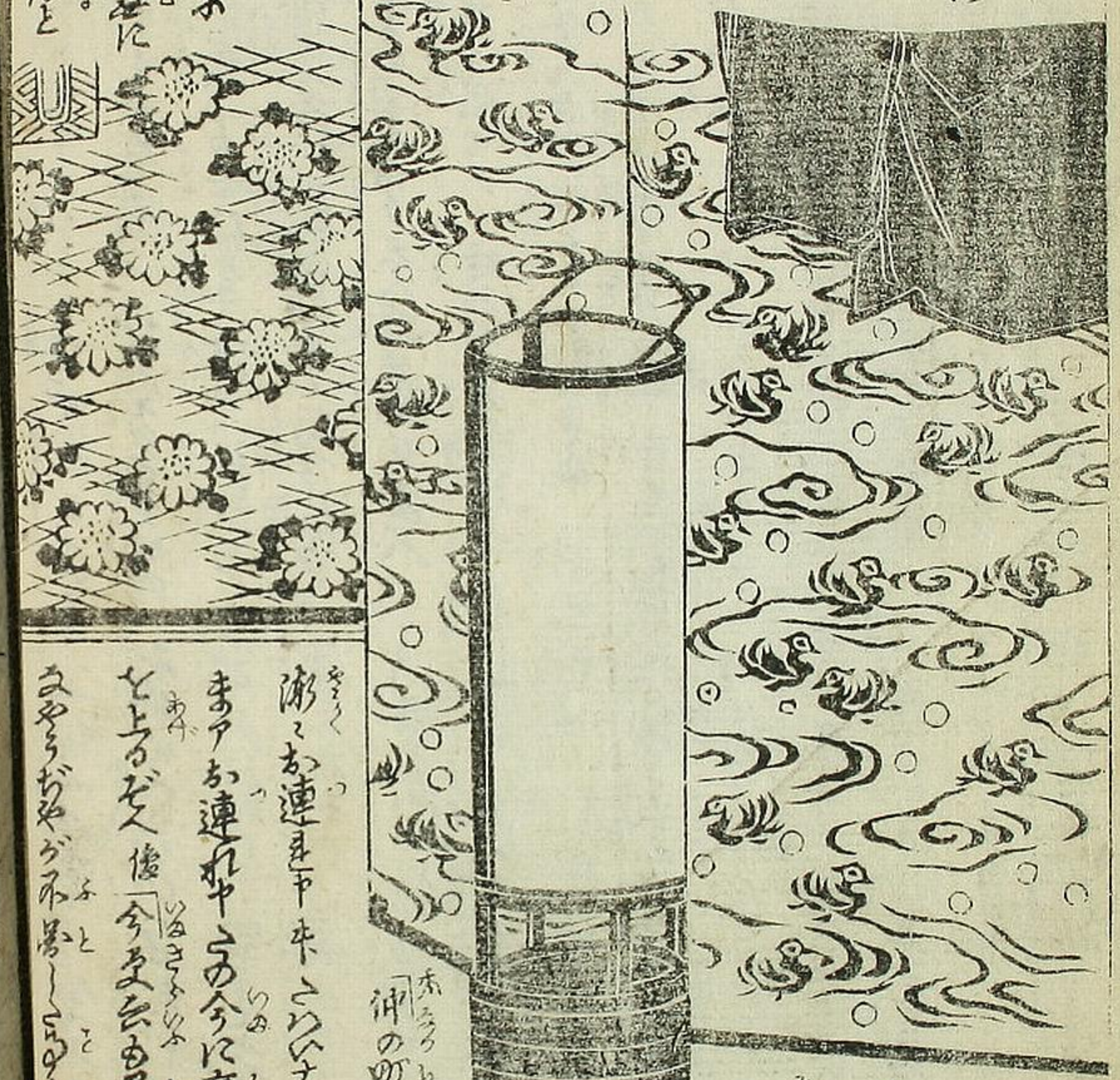
あれも
 物子も心
 悪くも
 遠くも
 其の多アアコレ
 夫も多アコレ
 悪くも
 の戸を
 まるも
 トは又白の内
 来るは

やま

初花と二世と花

始め
 より
 字
 分
 分
 由

輪
 油
 内
 と
 と
 と
 と
 と
 と



神
 後
 家
 出

つぎ 恋
付て暖
箆簾足返
入江岡の
待合券
下まより

仕中一の
按磨出まり
上へ入運入る引
違ひくぬ前の子
金丹賣物助出まり
四辺と伺ひ入あつて
物



下程の赤床下の画別出
運へりあり舞臺下より
階子の上りには先中
原風を呈せし外
更き赤へり燈を灯

小云子と三云とのむ十回紙幣と
あまをさる菅川何来生金紙幣の
番号と付合の世へ不審の付一まろ
只今夜永もあんでは掃へ上じの探案あり
是屋を冷儀のわいお付つらへ下提筆の中より十ま
と出二階をえ上て迄後ろへ不
あつととと拍子木の既と切うけに
は及奥号。初花部屋の場
本舞臺一面の平舞臺向う上
自へあせ二間の席の寄は下り腰
張の茶碗をよ上り二層中位切の隣子
と立切隣舞臺のむスツと



極々秋戸懸二階

上ノ秋夜の伴臣

因の障子をぬき

奥中を乃奥のト

下切穴上り口

より幕の

娼妓蓮系

被衣の形

上ノ履中

森惚たるこ

はめて出て来

子ト今夜の

やうな眠い

口は嘘

と原風の内へ

後合方ふまり

戸案内して

衣を冠り

かんで出て

例の針

匠さん華

妓が先

刻り

真

と上

後

先

の

後

先

の

後

先

の

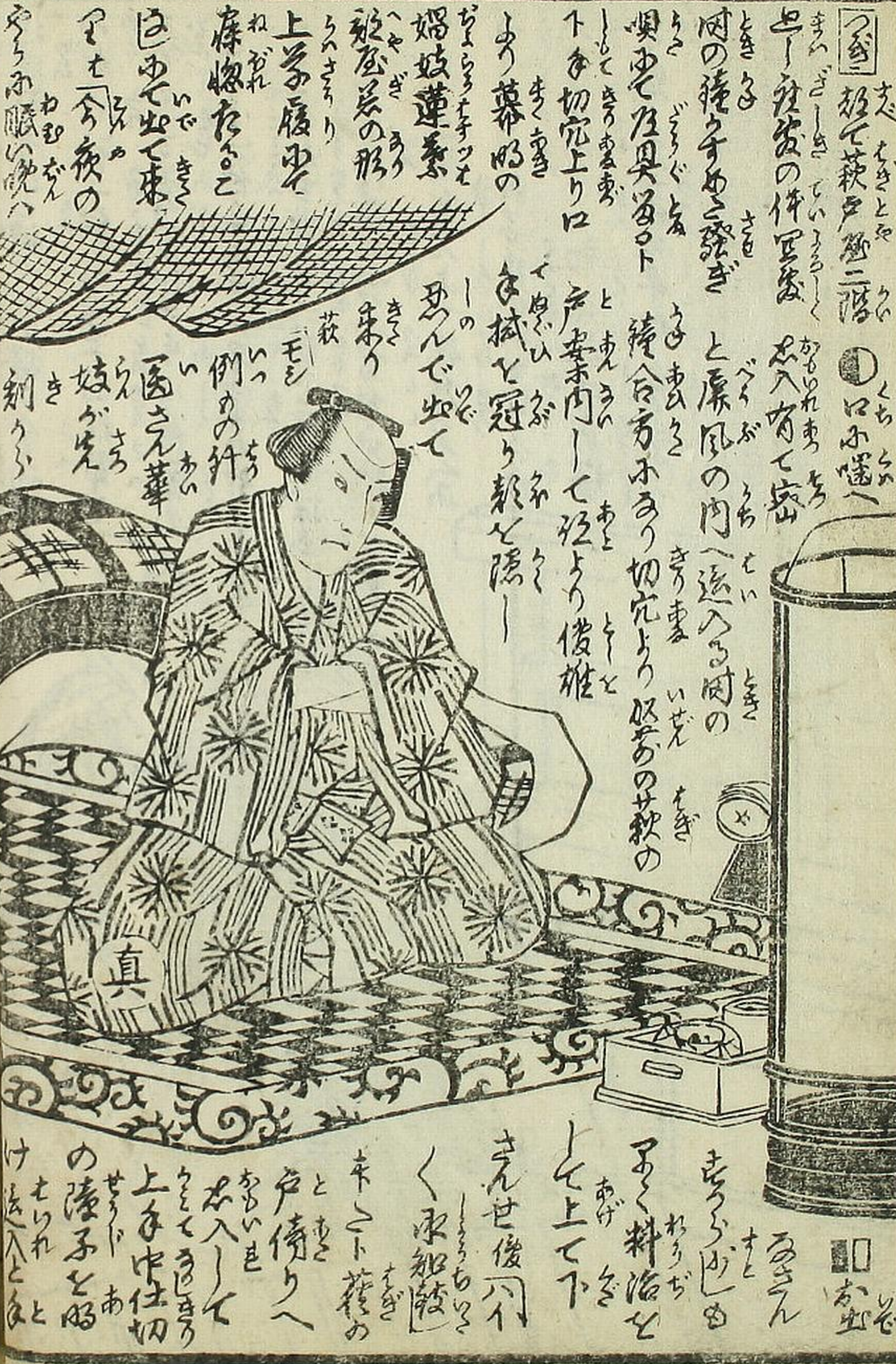
後

先

の

後

先



蓮葉の心紙と出

蓮葉の心紙と出

蓮葉の心紙と出

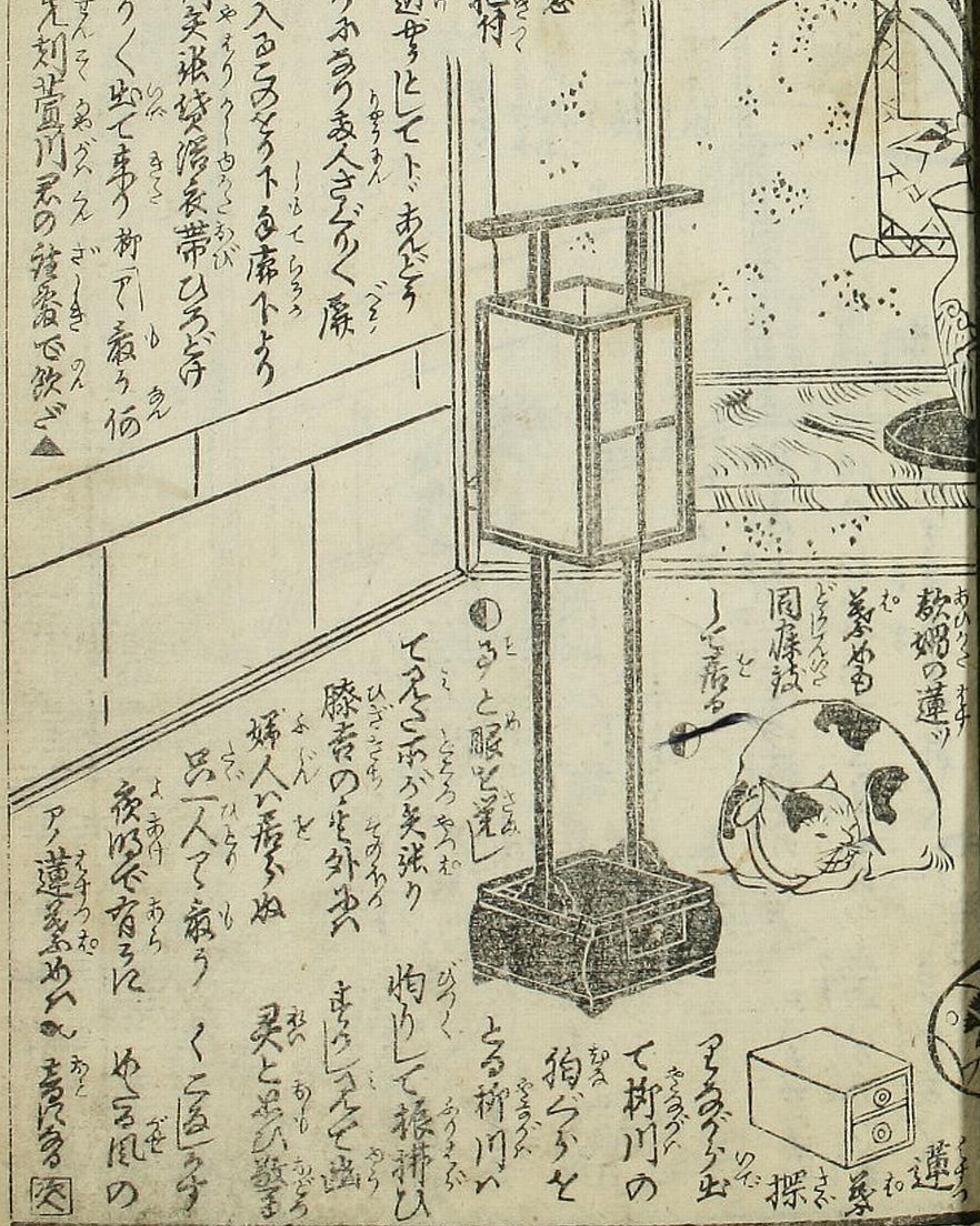
蓮葉の心紙と出

一不ふト
 抱付まハテ
 迷惑
 致し下さ
 ぞイ工く私
 致さる下要
 かるま平一抱付
 ぞ突退け逃せとてトあんと
 ぞ倒し睡りかきりあ人さどかく麻
 風の落へ送入るこり下る席下より
 以その柳川美娘袋帯長帯ひらひら
 雨を眼と擦りく出て来り柳ア着る何
 何と云僕も先刻並川君の控室で飲ぶ



如何様
 下ト仕終
 出て来
 原内
 原内
 の落
 研分出て後由
 一藤入空めく

一不ふト
 抱付まハテ
 迷惑
 致し下さ
 ぞイ工く私
 致さる下要
 かるま平一抱付
 ぞ突退け逃せとてトあんと
 ぞ倒し睡りかきりあ人さどかく麻
 風の落へ送入るこり下る席下より
 以その柳川美娘袋帯長帯ひらひら
 雨を眼と擦りく出て来り柳ア着る何
 何と云僕も先刻並川君の控室で飲ぶ



如何様
 下ト仕終
 出て来
 原内
 原内
 の落
 研分出て後由
 一藤入空めく

七人切

先期
後

今折

の世

十二回

さうさ物ぶらり
あつれとき
入同の鏡ありの下
の隙をを密とゆけ花の戸

番亭樂山作

梅堂國政画



華妓
おき
まき記

お体中
アコレ
お体中
アコレ

御明治四年
月日
編輯人 岩神正美

三冊よ切

武田 交来録

揚洲 周延画

倭洋妾横濱美談

三編よ切

岩神 正美録

梅堂 國政画

戀仇 荅盛街夕暮

御届明治十四年四月六日

編輯人
梶町区三番丁四番地

出版人
神田區元柳原町三拾三番地
船津忠治郎



010190513969

